バカとテストと召喚獣と転生者

震月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣と転生者

【Ｎコード】
Ｎ２７９２Ｎ

【作者名】
震月

【あらすじ】
精神感応者に分類される転生者である、村田稜花。
彼女が転生した先はバカテスの世界。
普通とはちょっと違う転生による転生者による物語。

プロローグ

こんにちは、白石（しらいし）なごみもとい、村田稜花（むらたりょうか）です。

よくあるような話の転生者です。

一般に転生者と呼ばれるものは……

以下割愛。

さて、私自身が転生者であるということは、自身の記憶に一度死んでいるという記憶があるからです。

もっとも、私がいた世界では転生者も含め、ある一つの言葉で統一されていました。

精神感応者と。

対して重要ではないのですが、覚えておいてくれたら幸いかと。

なんなんですかも～。

え？早く本編始めろって？わかりました。では、桜……

以下割愛。

鉄人がいる、校門へ

プロローグ（後書き）

恐ろしいほどの不定期更新になりそうですが、ご注意ください。
ちなみに、自分はなごなご萌ではありません。
オリ主を考えた際に真っ先に思いついたのがなごなご系キャラでした。

第一話（前書き）

問　以下の問いに答えなさい。

「調理の為にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である。

合金の例：ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋の答え

問題点：ガス代を払っていなかったこと。

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

合金の例：未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても……

村田稜花の答え

問題点：マグネシウムは加熱すると、まばゆい光とともに燃焼する

ため

合金の例：銅－ベリリウム合金

教師のコメント

確かに、銅にベリリウムを添加すると、金属疲労は無くなりますが

……

第一話

こんにちは、白石なごみもとい村田稜花です。

若干ながら説明を。

転生といっても二つあります。

死んだ直前の体や選択した体で転生するものと通常生殖……１８禁的なことをして誕生するという二つです。

今回の私は前者です。

ということを考えながら、坂道を上っていると、

「……お前は馬鹿だ」

「こんにちは、総長もとい鉄人」

「お、村田か。それよりもお前も俺のことを鉄人てよぶのか」

そこにいたのは、西村……先生です。

「まあいい、この二年を代表するバカを連れて行ってくれないか？」

「私のクラスは？」

「ほれ」

渡された、封筒の封を破る。

「Fクラスだ」

「なるほど」

と私がつぶやいて、白くなっている吉井明久にボソボソっとつぶやきました。

「再起動させました」

私が、作業終了をいう。

「毎回だけど、それ、恐ろしいな」

鉄人もとい西村先生がそんなことを言っていた。

Aクラスの前を通ったが、

「……」

引っ張ってきた明久が足をとめた。

私自身は、この豪華すぎる設備が嫌でFクラスにいるようなもんだから、とくに興味はない。

「遅れました」

私が、Fクラスの扉を開く。

「おう、遅かったじゃねえか」

教壇には坂本雄二がいました。

なぜ、親しいか？

理由は、単純で、転生の際に、召喚獣システムを使用したらしく、その時に偶然、原作キャラにあったためです。

「と、いうかお前がFクラスって不思議だな」

「テスト、古典しか受けなかったから」
「ふ～ん、まいっか」
と会話したところで

「すみません、ちょっと遅れました★」

「「さっさと座れ（しやがりなさい）、この蛆虫やろう！」」
雄二と私の声が重なった。
「いきなりだけどひどい！」
明久本人は愛嬌よく言ったのだろうが、あいにくここはＦクラスなのだ。
生半可なものでは対処できない……と思っている。
「って、あれ？なんで教壇に雄二がいるの？」
「気にしたら負け」
って私が言ったら、
「おい。まあいい。一応、このクラスの代表は俺だからな」

えー。

「おい、村田。その顔はないだろ」

「そうだよ雄二。君が、代表なんて……」

「私は、雄二が代表よりも代表が先陣切って騒ぐやつだったということに驚いている」

「「……それってほとんど変わってないよね（な）」」

「気にしたら負け」

そうこうしているうちに、先生が入ってきた。

第一話（後書き）

自分は、大変、文章を書くのが下手です。

ここを、こうしたほうがいい、などあったら、随時教えてください。

第二話（前書き）

ストックなしのそのまま書いています。

そのため、更新が恐ろしいほど遅くなることがありますのでご注意ください。

第二話

こんにちは。白石なごみ、こと村田稜花です。

つい先ほどまで担任教師がいたのですが、出て行ってしまいました。

『原作』を知っている方はご承知でしょうが、明久と雄二が騒ぎ始めたのでそれを静かにしようと教卓をたたいた結果、教卓がチリと化したのです。まあ、私には関係ない話ですが。

一応、その間に自己紹介がありました。まだ自己紹介を行っていない人もたくさんいるのですがね。

無論のこと、召喚獣システムで転生した私のこともありましたが、特に問題なかったようです。さすが、Ｆクラス。というよりも、この世界自体がおかしいのでいまさら、私がいても問題ないのでしょう。

担任教師が代わりの教卓を持ってくる間に明久と雄二が外に出て行きました。

こっそり後を付けることにしましょう。

「「姫路さんのために」Ａクラス相手に試召戦争やってみない……って！？」

「なるほど、そんなに姫路に好意をもったのか……」
「いろいろな意味で明久は終わりましたね」
明久が、あわてる。
無論、『姫路さんのために』は私が付けくわえたものですが。
「明久……その気持ちはわかるが、あの場では言うなよ」
「そうなったら、わかってますよね？」
「怖い！怖い！特に村田さんが怖い！！それに、僕はそんなこと……」
「ほほう。愛する、姫路さんにそれを伝えて泣かせてもいいのですか？」
「明久、……お前がそんな卑劣な奴だとは思わなかったぞ」
「いや、そんなつもりは……」
明久が、混乱状態に入る。
「さて、どうしますか？この二年を代表するバカの提案に乗りますか？」
「ああ、俺もそのつもりでいたからな」
「ならば、がんばってください。私は、できるだけ外野にいますか

ら」

「それは無理な相談だな。お前はきっちりとFクラスの人間として活躍してもらおう」

「ちょっと!?僕の話を……」

「「黙れ、この二年を代表する大馬鹿め!!」」

「ひどい!」

「お、先生が戻ってきたぞ」

「そうですね。さっさと戻りましょう」

私はほぼ瞬間移動的な速度で自分の席へ退席します。

意味違う?まあ、「退却＋自席に＝」という等式から退席と書きました。

「その特技、僕にも教えてくれ!」

そう、明久につぶやかれましたが

「自分で習得しやがれ、この教えて厨め」

と返しておきました。

へ?なんか違う?それは作者が普段使わない、健全な人間ですからね。

ごめんなさい。嘘です。まあ、表向きは健全な人間ですけどね。

さて、先生が帰ってきたことで、再び、自己紹介再開です。

そして、雄二の番になりました。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも雄二でも好きによんでいい」

さて、我らが代表はどうでるか……

「みんなに一つ聞きたい」

そして、壁、床、机。

順々に見て行った。

「Aクラスは冷暖房完備で座席はリクライニングシートらしいが……」

ここで、ミスる奴がいる。

「不満はないか？」

『『『大ありじゃーーーーー！！』』』

まさか、ここの防音対策はここまで大きい音を想定していないだろう。

たぶん、この声は、隣のＥクラスまで届いただろう。

「だろう？俺も、この現状には大いに不満がある。代表として問題意識を抱いている」

「そうだそうだ」

「いくら学費が安いからってこれはあんまりだ！」

「そもそも、Ａクラスだって、同じ学費だろ？この設備はあんまりすぎる！」

確かに、この現状はまずいと思う。

今は病人こそ出ていないものの、少しでも体調が悪いものが出たらすぐに病院行きになってしまうほどの加速性を持ってます。

「みんなの意見はもっともだ。そこでだ、これは代表の提案なのだが」

代表でなくとも、思いつく。

この現状を打破する方法。

だが、明久や私、雄二が考えているようなことは彼らにはわからないだろう。

「我がＦクラスはＡクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う」

私自身はＡクラスの備品はいらないと思う。

あっても、それだけ集中力がそがれます。

だけど。

行きたいと願う友を、行かせたいと思うものを一生懸命押すのもまた面白いと思う。

第二話（後書き）

稜花のキャラが安定しませんが、そのうち安定すると思います。

第三話

こんにちは、白石なごみもとい村田稜花です。

さきほど、Ａクラスへの宣戦布告を宣言したのですが、今はＦクラス内部にあきらめムードが高まっています。

曰く「俺達が勝てるはずがない」

曰く「秀吉と姫路さんがいれば後はいい」

など。

開戦前から、あきらめるとは潔いですね。私の怒りを買うことを恐れないその精神を評価しましょう。

次の新月の夜には気をつけましょう。永遠の闇へ落として見せましょう。嘘ですが。

まあ、確かに、絶望するものの気持ちも分からなくはありません。

テストの点数だけが、すべてといっても過言ではないこの文月学園では、ＡクラスとＦクラスの差はかなり大きいと思う。確かに、私自身は、振り分け試験の際に名前を書かないことでＦクラスに入ったのです。前世の時の能力から考えるとＡクラスの下かＢクラスの上程度で、姫路さんは学年次席と、聞いています。

つまり、主力となりえるのは、姫路さんのみであり、私が補助攻撃が可能だとしても、他はまともに戦った場合、戦力として期待でき

るかどうか、は判断に迷います。

勉強をやっていないだけで頭のいい、雄二ならば、うまく戦略を引き出してくれるでしょう。

もっとも、私の召喚獣の武器は、弩なので敵射程外攻撃（アウトレンジ）に徹しなければならないでしょう。

ミドルレンジも可能だと思いますが、姫路さんクラスの能力を有しているAクラス相手には難しい、戦法でしょう。

“まともに戦えば”の話ですが。

「そんなことはない。俺が勝たせて見せる！」

「何をばかなことを」

「できるわけないだろ」

「何を根拠にそんなことを言ってるんだ」

などなど。

「根拠？根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚獣戦争に勝つことのできる要素がある」

Fクラスの性格さえ把握できれば、Aクラスに勝てる戦い方も出てきますね。

まあ、危険な仕事―（退学処分？）はすべて明久に押し付けましょ

う。

「おい、康太。畳に顔を付けて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……！！（ぶんぶん！！）」

「は、はわ！？」

あわてて、スカートの裾を抑える姫路さん。

さすがは土屋康太（ムッツリーニ）です。

あの能力ならばＣＩＡでも行けばいいのですがね。

「土屋康太。こいつがあの有名な【ムッツリーニ】だ」

「……！！（ぶんぶん！！）」

風の噂では、ムッツリ商会というものを経営しているらしく、一部の生徒に人気があるという。

私自身は、危険だと思ってるんですけどね。こう、風紀的に。

某生徒の台詞を付け加えれば、私の風紀は独断と偏見です。

クラスを見てみると、？と首をかしげているものもいれば、「あいつが……」と感心している奴もいます。

「ムッツリーニだと！？」

「やつが、そうなのか！？」

「だが、あそこまで覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ」

「ムッツリに恥じない姿だ」

なるほど、このクラスの風紀は危ないようですね。こう、風紀的に。

「姫路のことは、言うまでもないだろう。全員その力を知っているはずだ」

たぶん、知らないのは私だけでしょう。

私自身は、成績表と紙切れに興味はありませんから。

「そうだ、俺たちには姫路さんがいるんだった」

「彼女ならばAクラスに引けを取らない」

と言っていた。

まあ、他にもあったのだが……

「木下秀吉もいる」

「おお……」

「秀吉の姉ってAクラスだよな？」

「その弟なら……」

残念なことに、このクラスは馬鹿しかないので、能力はFクラスのクラスメイトと同じ学力しかない。

「当然、俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「Aクラスレベルの実力者が2人もいるってことだよな！」

士気が上がるのはいいと思う。

士気がない戦闘は勝てるはずがない。どんなに強力な軍備を持っていたとしても。

まあ、米軍にはかなわないはずですけど。

「それに、吉井明久もいる」

……。

クラスが静まり返った。

「ちょっと、雄二。そこで、僕の名前を出す必要はないよね！？」
ありますね。大いに。
「明久って誰だ？」
「聞いたことないぞ？」
「有名なのか？」
「ああもう！せっかく上がった士気に陰りが見えてるよ！」
「そうか、知らないか。なら教えてやる。こいつは【観察処分者】だ」
「それって、ばかの代名詞じゃなかったっけ？」
「違うよ、ちょっとおちゃめな１６歳に付けられる愛称で……」
「そうだ、馬鹿の代名詞だ」
「肯定するなよ、馬鹿雄二！」
雄二のもとへ抗議に言った、明久。
「あの……」
「ん？どうした、姫路」
「【観察処分者】ってなんですか？」

「知らないのか？具体的に言うと教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなす生徒といった具合だな」

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

「ただな、召喚獣は教師の監視下でなければ喚び出せないし、物に触れるようになった召喚獣の負担が何割か明久自身にフィードバックされるんだ」

「それじゃあ……」

「さすが姫路、察しがいいな。フィードバックされるということは、召喚獣の疲労や痛みは明久自身に返ってくる。教師の許可が必要なせいで自分の為にも使えないから、正に罰だな」

まあ、観察処分者ゆえの戦法もありえます。

なぜなら、人間と同じ行動がとれるうえ、人間よりも力がありますからね。

具体的な戦法は、アニメ第１２話？で見てください。

「おいおい、観察処分者ってことは、召喚獣がやられると本人も痛いってことだろ」

「それなら、おいそれと召喚できないやつが一人いるってことになるんだよな？」

「役に立たないじゃないか」

それが、役に立ったりするのが明久クオリティ？ってやつなのです。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきだよね？」

「さっさと、席に戻れ馬鹿野郎。邪魔だ」

「ひどっ！」

さすがに、馬鹿野郎はひどいとますこの馬鹿野郎。

「そして、少し前にテレビで有名になったやつがいる」

おや？そんなこともありましたね。うまく煙に巻いたりしました。いろいろと、闇の方から手をまわして。まあ、嘘ですが。

「俺たちの、禁断の切り札だ。正真正銘のジョーカーってやつだ。興味があるなら来てくれないか？村田」

「わかりました」

なんか、となりで明久と姫路さんがいちゃいちゃしだしたけど気にしない。

「こいつが、……召喚システムによって【転生した人間】である、村田稜花だ」

「こいつが、あの“村田”なのか？」

「ああ、噂に聞いたことがある。彼女にちょっかいを掛けてきた女子数名がその翌日に、再起不能になっているって噂だ」

「鉄人さえを恐れる奴って聞くぞ」

「正真正銘のジョーカーだ」

私のあだ名はジョーカーらしいです。

「お前たちが、聞いていると思う、噂はすべて本物だ」

「ついでに、雄二は霧島に何度も告られている」

『総員狙えぇぇ――！』

おお、明久が復活しました。

「ちょ、おま、何言ってやがる！」

「まあ、嘘ですが」

「っち！命拾いしたな雄二め！」

明久が声を荒げる。

その明久めがけて姫路さんと島田が攻撃を仕掛けようとしていた。

「まあ、この程度は、ほんのちょっとしたことなどで皆さんは情報というものに注意しましょう」

「ぐっ！言い返せねぇ。」

「おい、あの神童さえ手玉に取ってるぞ！」

「ああ、あいつに言うとおりにしなくちゃ俺らの命が……」

「ジョーカー閣下どうか、お命だけは……」

あらぬ噂ができたようです。

まあ、“命”に関しては自分は反論できる余地がないので……。

「ま、まあ、若干道はそれたが……」

と雄二が仕切りなおした。

「みんな！Aクラスのシステムデスクを取りに行くぞ！」

『おーーーーーーーー！！』

「「おー！」」

私と姫路さんが小さく声を上げる。

第三話（後書き）

取りあえず、村田稜花の設定について。

前世は……後に明かします。

趣味は他人弄りと独断と偏見による風紀一（？）維持と読書。

身体能力は元ネタの白石なごみ並み。

住居は……ネタばらしになりそうだから後に。

召喚獣の戦闘は基本的にアウトレンジ戦法。

腕輪あり。

第四話

お久しぶりです、村田稜花です。

作者のグズのせいで更新が遅くなりました。

さて、現在の状況ですが、あの後、明久がDクラスに行って、ぼこられて、その後開戦という形になっています。

というわけで、現在私と、姫路さんは補充テストを受けています。

ものは数学。

結構簡単なものが転がっています。

ただ、計算して書くだけの簡単な作業なのですらすらと解けます。

ああ、回答欄を間違えないようにしなければ。

もっとも、補充を受けたところで私は今回参加しないことになっています。

具体的に言うと、戦力の秘匿ということです。

姫路さんも本来そのはずでしたが、危機的状況になった時、参戦するということになっています。

「はい。終わりです」

テストの監督者が言った。

その直後、姫路さんはだっと駆け出しました。

おや、参戦するのですか。

では、私もまいりましょう。

――――――――――――――――――――――――

私がついた時にはすでに危機的状況になっていました。

もっとも、姫路さんがＤクラス代表平賀を抑えていますが。

サイト・シュバリエ・ド・ヒラガ・ド・オルニエールのほうではありません。

「村田稜花、Ｄクラス代表を除くここにいるすべてのＤクラスに対し、数学勝負を申し込みます」

「「「「な！？」」」」

おや、Ｄクラスの雑兵どもが驚いています。

「試験召喚獣召喚『サモン』」

「「「「くそ！『サモン』」」」」

村田稜花　数学　４８０点

ＶＳ

Ｄクラス近衛兵　数学５００点

２０点差ですか。

まあ、私の腕輪の能力で何とかなるでしょう。

「「「「行け！」」」」

それぞれの召喚獣が攻撃をかけてきます。

ですが、単純に突撃しかできない召喚獣ですから、結構楽に攻撃できます。

まず第一撃。次に第二撃。そして大惨劇。いえ、第三撃。

はい。本当に大惨劇です。

簡単に三人を打ち取りました。

残りの数人が攻撃をかけてきました。

数回はかわせたものの、攻撃を受け、ついにダメージを

村田稜花　数学　４８０点

ＶＳ

Ｄクラス近衛兵　数学２８０点

受けませんでした。

「「なに！？」」

確かにふつうはあり得ませんよね。

これが腕輪の能力だったりします。

遅延（ディレイ）。

発動中受けたダメージを無効化する代わりに3分後、受けたダメージの合計分を受ける。

おっと、終わったようです。

姫路さんの圧倒的な力の前に平賀は倒れこみました。

――――――――――――――――――――――――――――――――

どうやら、クラス設備交換は行わないようです。

その代わり、雄二はいくらかの条件をかけました。

設備交換の代わりならそれくらいやろうと言ったので、私も一つ条件を付け加えました。

簡単に飲んでくれました。

内容は、こちらがＧＯサインだしたら、Ａクラス模擬戦をかけてほしいと。

アニメみたらわかりますよね？

漸減要撃作戦です。

もっとも、これは持久戦に向きませんから、早く目標を片づけなければなりませんが。

取りあえず、今日は明久のテストの結果を見れたので、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしなければならないでしょうね。

第四話（後書き）

初めに言います。

すみません。

キャラの台詞がうまく書けなくて、悩んだ結果、このようなものになってしまいました。

原作キャラでもっとも原作とは違うのは明久でしょう。

振り分け試験こそ、Ｆクラスの中レベルでしたが、稜花の飴と鞭の結果、がんばればＤクラスいったんじゃね？ってくらいまでテストの点数が上がっていたりします。

もっとも、それが通用するのは世界史と日本史のみですが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2792n/

バカとテストと召喚獣と転生者

2010年12月7日22時23分発行